

■図書ボランティアの実践事例

「わいわい文庫」活用推進に向けた取り組み —小さな図書ボランティアの大きな挑戦 2年間の軌跡

図書ボランティア 花の子ぼけっと(福井県)
稲垣美加 高間豊美

はじめに

〈花の子ぼけっと概要〉

2004年から福井県越前市立花筐小学校での読み聞かせ活動を開始。在学生・卒業生の保護者で構成されており、2019年度は24名が登録。

小学校での活動(毎週朝の読み聞かせ、年2回の校内イベント(こわいお話会、朗読劇))

地域での活動(児童によるお話会のサポート、公立図書館でのお話会)

〈「わいわい文庫」との出会い〉

2016年度伊藤忠記念財団の子ども文庫助成対象団体となり、活動拠点である花筐小学校に、地域に開かれた文庫として花の子ぼけっとの蔵書を設けました。翌年のフォローアップ訪問の際、「わいわい文庫」を紹介していただき、読書バリアフリー研究会に参加して理解を深め、「わいわい文庫」の寄贈を受けました。

〈学校との協働〉

活動拠点の花筐小学校図書主任に「わいわい文庫」を活用したプロジェクトにつ

いて相談しました。小学校の特別支援学級には、2名の子どもが在籍しています。図書主任は、読書バリアフリー研究会に参加していただき、特別支援学級の担任、教務主任に話を通し、学校の賛同を得ることができました。

〈わいわい文庫利用対象者〉

特別支援学級在籍児 2名
(5年生、6年生の2年間)

取り組んだこと

〈「わいわい文庫」を使って朗読発表をやる〉

「学校との連携が密に取れており、地域へ向けての発信の場も持っている」などの花の子ぼけっとの特長を生かし、児童と朗読発表をすることにしました。

〈テーマ〉

「わいわい文庫」を活用した朗読発表を通じ、表現力、自己肯定感、自己有用感を高める

〈朗読発表のめあて〉

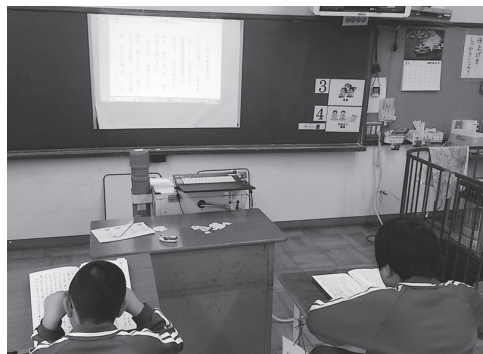
1. 本を読み発音することで語彙を増やす
2. 人前で発表することに慣れる
3. 朗読を通じて、見てくれる人、聞いてくれる人に気持ちを伝える
4. 友達の発表から学び、自分の表現力を高める
5. 役割を通して自信をつけ、自己肯定感を育む

〈本番までの手順〉

1. 「わいわい文庫」から選書し視聴する（花の子ぼけつとが提案し、担任と児童で決定）
2. 役割を決める（人数不足分は花の子ぼけつとメンバーで補う）
3. 「わいわい文庫」で練習（授業の一環として）
4. うまく読めるようになったら台本で練習
5. 他の出演者と合同練習、校内リハーサル
6. 発表当日、現地での場当たり、リハーサル、本番

授業時間における練習は、教育活動であり、担任にご指導をお願いしました。

花の子ぼけつととの合同練習は、教室で行い、詳細はその都度担任と相談しながら進めました。必要に応じて小道具や衣装の製作、台本の作成、発表先との連絡調整、保護者との連絡なども行いました。

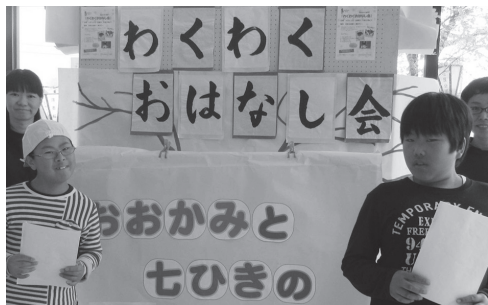


〈活動の様子〉

Ⅰ 地域へ飛び出そう!

Part.1「わくわくおはなし会」での発表
演目 『オオカミと七ひきの子ヤギ』：わ
いわい文庫2017-V2

校区内の公園で開かれるさくらまつりでは、花の子ぼけつとと自治振興会の共催で子どもによる読み聞かせ会「わくわくおはなし会」を毎年行っています。学校での練習を経て、子どもからお年寄りまで大勢のお客様の前で、普通学級の子どもたちと同じ舞台に立ち、初めての発表をしました。



Part.2 「日本赤十字病院 緩和ケア病棟
エキナケア」での発表

演目 『オオカミと七ひきの子ヤギ』：わ
いわい文庫2017-V2 (七夕会2018)

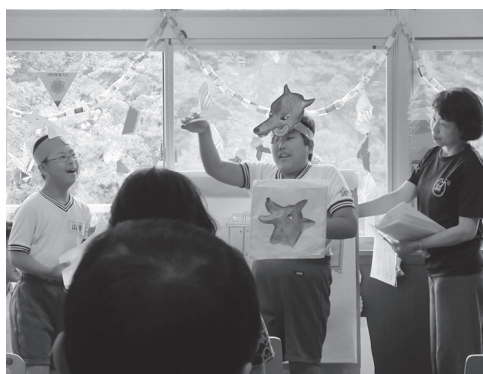
『コッケモーモー!』：わいわい文庫2014
-V1 (クリスマス会2018)

『おいしい おと なあに?』：わいわい文庫
2018-V1 (七夕会2019)

患者さんやそのご家族が見守る中、七夕
会、クリスマス会で朗読発表をしました。

クリスマス会では、他校の特別支援学
級の子どもたちの発表も見ることができ、
合同でクリスマスソングを歌い交流しまし
た。読み聞かせの途中、とっさの判断で
場の空気を読むという行為が見られ驚き
ました。

2019年の七夕会では、観客参加型の
演目に挑戦。患者さんとその家族、看護
師さんたちとのやりとりが楽しそうでした。



Part.3「地域密着型介護老人福祉施設
つつじの家」での発表

演目『オオカミと七ひきの子ヤギ』：わい
わい文庫2017-V2

『コッケモーモー!』：わいわい文庫2014
-V1

花の子ぼけっとに公演依頼がありました。この施設には、子どもが訪問したことがないとのことだったので、特別支援学級の子どもたちとの共演を企画しました。授業時間での出張公演が可能かを担任に相談し、学校からの許可が出て共演が実現しました。

子どもの演目のほか、花の子ぼけっと主導で子どもたちも参加しての手遊びや歌を披露し、帰り際には施設利用者の方々から「また来てね～」の声があがりました。



Part.4「公立図書館にて おはなしお楽しみ会」での発表

演目『コッケモーモー!』：わいわい文庫
2014-V1

年に2回、近くの公立図書館で、花の子ぼけっと担当のおはなし会が開かれます。

2019年1月の回に、特別支援学級の子どもにも出演依頼をしました。これは学校外の活動なので、保護者の方々と連携しました。観客は園児、小学生とその保護者の約20名ほどでした。アットホームな雰囲気の中、出演者も観客も楽しい時間を過ごしました。



II. 校内での発表

演目『コッケモーモー!』：わいわい文庫
2014-V1

花の子ぼけっとが各教室で読み聞かせをする時間を利用し、特別支援学級の子どもたちが外部公演の予行を兼ねて、同学年のクラスで発表をしました。同級生たちの前での発表はとても誇らしげでした。同級生にとっても、特別支援学級に在籍する二人が頑張る様子を間近に見ることで、彼らの新しい一面を知ることになりました。



〈活動を終えて〉

①マルチメディアDAISY図書使用について担任からの感想

1. 教室前モニターを利用することにより視線が上がるので姿勢が良くなる
2. マーカー部分を追って読むので集中でき、読みの練習にも効果的である
3. 漢字の読み方がわかる
4. 「ことば」が増える
5. 普段、自分では読もうとしない本にもふれることができ、読書の幅が広がる

②選書について

よく知られた昔話は、発表者の発声、発音に困難があり聞き取りにくいことがあっても、聞き手がストーリーを知っているので内容を補え、使いやすい題材です。

朗読劇にしやすい絵本、大型絵本化されている絵本であるということも選書の基準になりました。

③子どもの様子

実践後の効果

本番は場所も変わるし観客もいるので、かなり緊張します。しかし、緊張によって発表後の達成感が味わえるので、そこに喜びが生まれます。一生懸命に読むことで聞き手に感動が伝わるといことが体感できるのです。ふだんは何かと助けってもらうことの多い支援学級の子どもたちですが、読み聞かせを通じて人に伝える、喜んでもらうことで役に立っているという実感が、成長を促していると感じました。以下は、子どもたちの感想です。

M.Mさん

はじめにDVDを見ながら読む練習をしました。楽しかったです。

本番のとき、少しきんちょうしました。ぼくはいろいろな動物の役をしました。うまく言えました。「上手だったよ」と言われてとてもうれしかったです。日赤の人が喜んでくれたのがうれしかったです。またやりたいです。

M.Yさん

ぼくたちは、「コッケモーモー」のお話をしました。

ぼくは、きんちょうしたけどみんなの前

できました。

おんどりが鳴き方をわすれてくやしくなったところをやりました。

途中で、赤ちゃんが泣いたのでびっくりしてしまいました。

みんなが「かわいいね」と言ってくれました。楽しかったです。

また、おじいちゃんやおばあちゃん、お父さんやお母さんと近所でやりたいです。

補足；日赤のエキナケアでの発表をご覧になった保護者の方は、入退院を繰り返したわが子の読み聞かせに、涙がとまらない様子でした。

④図書ボランティアができること

A) 台本の工夫

個人の視力に合わせて、フォントを大きくしました。

例. M・Yさんの場合 弱視のため、30cm離してフォント22ポイント

文字の大きさなどは、担任を通じて盲学校の先生に指導を仰ぎました。縦書きが横書きかは「わいわい文庫」に合わせました。また、ページをめくらなくてもセリフが読み続けられる工夫をしました。

B) 小道具の工夫

演出において、コスチュームや小道具類を製作しました。ただ、著作権の関係で、絵の拡大コピーができないことが多

く、大勢の前での発表では著者の許諾を得て、模写をしたり、メンバーで絵を手描きしたりするなど、多くの時間と労力が必要でした。むずかしい課題ではありますが、わいわい文庫利用者（障害者）への特例を設けていただくなど何らかの対応を期待したいです。

補足：「コッケモーモー！」のコスチュームをまとったM・Yさんをうらやましく思っていたM・Mさん。彼のために、「わいわい文庫」には収載されてませんが、花の子ぼけつとが過去に公演した演目『しりとりのだいすきなおうさま』の朗読劇をさくらまつりで披露しました。主役である王さまの衣装をフル装備し、普通学級の異学年集団に交じって、大変素晴らしい王さまを演じてくれました。



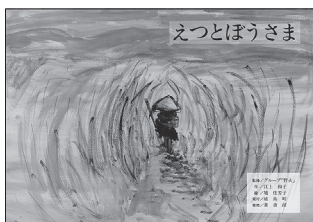
このプロジェクトを始めるにあたり、学校の協力体制が不可欠でした。2004年から花筐小学校で図書ボランティアをさせていただいているということもあり、さまざまな形で連携してきましたので、信頼関係の上に成り立ったプロジェクトだったと思います。

試行錯誤しながらの取り組みでしたが、私たちのような図書ボランティアグループが、障害のある子どもたちと共に地域へ

飛び出せたのも、この「わいわい文庫」のお陰です。子どもたち、保護者、担任の先生、私たちにとって、心に残る活動となりました。

今後も、読書の喜びを多くの人たちに届ける「わいわい文庫」の輪が広がっていくことを切に願っております。同時に伊藤忠記念財団のますますのご発展をお祈り申し上げます。

日本昔話の旅 〈九州・沖縄〉



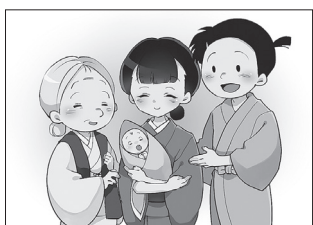
福岡県 えつとぼうさま



大分県 炭焼き小五郎と玉津姫



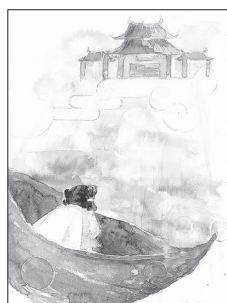
佐賀県 おとわ観音由来(大歳の火)



長崎県 竜女 おすわ



熊本県 てんぐのかくれみの



宮崎県 海幸彦と山幸彦



鹿児島県 鹿児島



沖縄県 クスクエーのおはなし